

## 研究主題 「他者を思いやる豊かな心を持った生徒の育成」

～全教職員参画のもと、「考え、議論する道德」を目指して～

埼玉県立大宮東高等学校

### 1 研究主題の設定理由

本校は県内唯一の、普通科・体育科を併設した高等学校である。この特色を生かし、部活動を通じて心技体の充実に努め、挨拶・身だしなみなど、礼儀を重んずる生徒の姿は地域等で高い評価を受けている。一方、生徒の実態をみると、実体験不足から問題行動や学習意欲低下など解決すべき課題もある。

本校の道德教育重点目標のひとつに「規範意識を高め、他者を思いやる豊かな心を持った生徒を育成する。」がある。全教職員が参画する道德教育推進体制を整え、着実に目標を達成することで、本校の課題解決を図りたい。

### 2 研究の仮説

- (1) 規範意識を高め道德的実践力を身に付けていくためには、ただ言われたことを守るだけではなく、具体的な場面に即してその意味・目的を考察するなどの「考え、議論する道德」が効果向上につながるのではないかと。
- (2) 道德教育において、全教職員の共通理解を図ることや、計画・実施・評価・改善に資するために、目指す生徒像をもとにした「道德教育ルーブリック『心の筋力』」を作成・活用していくことが有効ではないかと。

### 3 研究の経過

時 期	内 容
年間	各教科・学年における人間としての在り方生き方に関する教育 地域連携事業（ふれあい体験、部活動ボランティア活動）
4月	令和7年度道德教育全体計画についての職員研修 「心の筋力」（ルーブリック）の周知
7月	第1回評価（7/16生徒、教職員アンケート）
8月	研究中間発表（8/22「高等学校在り方生き方教育研修会」）
9月	中間発表報告・職員研修
11月	1年レジリエンス研修会（11/27）先進校視察
12月	授業公開・研究成果発表（12/5） 第2回評価（12/23生徒、教職員アンケート）

### 4 研究の内容

- (1) 「考え、議論する道德」の指導方法の研究

「考え、議論する道德」とは『あなたならどうするか』を真正面から問い、自分

## 〈様式2〉 令和7年度埼玉県道德教育研究推進モデル校 実績報告書

自身のこととして、多面的・多角的に考え、議論していく<sup>1)</sup>ことである。このためには、生徒が問題意識をもち、自分との関わりに引きつけて考える学習過程が不可欠である。

そこで在り方生き方教育に関する望ましい学習活動を以下のように整理し、計画的に活動を展開することにした。また、その取組を支えるために、在り方生き方教育推進委員会が中心となり、道德教育重点目標の達成に資する各教科の実践例を収集・整理し、組織的に共有することとした。



### (2) 目指す生徒像を明確化したルーブリックの作成・活用についての研究

#### ① 目指す生徒像の明確化

令和6年度より本校の道德教育重点目標に主体性(チャレンジ)を追加し、「『公共性』を大切にする力」「思いやる力」「チャレンジする力」の3つの力を身に付けた状態とした(図1)。さらにこの3つの力を「心の筋力」と名付けた。

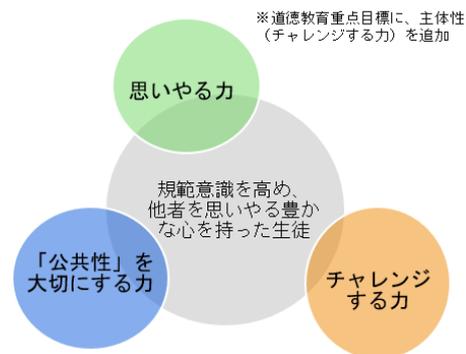


図1 心の筋力

#### ② ルーブリックの作成

道徳的心情は様々な行動を通して実現される(「こころ」はみえないが「こころづかい」はみえる)ことから、育てたい力(「心の筋力」)の定着度ををはかるために(図2)のようなルーブリックを令和6年度に作成した。ルーブリックでは、3つの「筋力」を高めるために身に付けてほしい資質・能力を各3つ(計9)を明らかにし、さらにその実現度を3段階(A～C)で示している。

「心の筋力」ルーブリック  
「大宮東高校ホームページ」道德教育の推進  
<https://oh-h.spec.ed.jp/%E9%81%93%E5%BE%B3%E6%95%99%E8%82%B2>



評価項目	評価・観点	A	B	C	育成する力
思いやる力	① 傾く力	相手の立場に立って、自分の感情・意見を押し付けず、相手の感情・意見を傾き、傾きながら話し合える。	相手の感情・意見を傾き、傾きながら話し合える。	相手の感情・意見を傾き、傾きながら話し合える。	傾く力
	② 結ぶ力	相手の感情・意見を傾き、傾きながら話し合える。	相手の感情・意見を傾き、傾きながら話し合える。	相手の感情・意見を傾き、傾きながら話し合える。	結ぶ力
	③ 成す力	相手の感情・意見を傾き、傾きながら話し合える。	相手の感情・意見を傾き、傾きながら話し合える。	相手の感情・意見を傾き、傾きながら話し合える。	成す力
「公共性」を大切に する力	④ 礼儀を重んずる力	礼儀を重んずる。	礼儀を重んずる。	礼儀を重んずる。	礼儀を重んずる力
	⑤ 場面に合わせた行動をする力	場面に合わせた行動をする。	場面に合わせた行動をする。	場面に合わせた行動をする。	場面に合わせた行動をする力
	⑥ ルールを守る力	ルールを守る。	ルールを守る。	ルールを守る。	ルールを守る力
チャレンジする力	⑦ 継続する力	継続する。	継続する。	継続する。	継続する力
	⑧ 目標を立てる力	目標を立てる。	目標を立てる。	目標を立てる。	目標を立てる力
	⑨ 改善する力	改善する。	改善する。	改善する。	改善する力

図2 ルーブリック

#### ③ ルーブリックと定着度調査

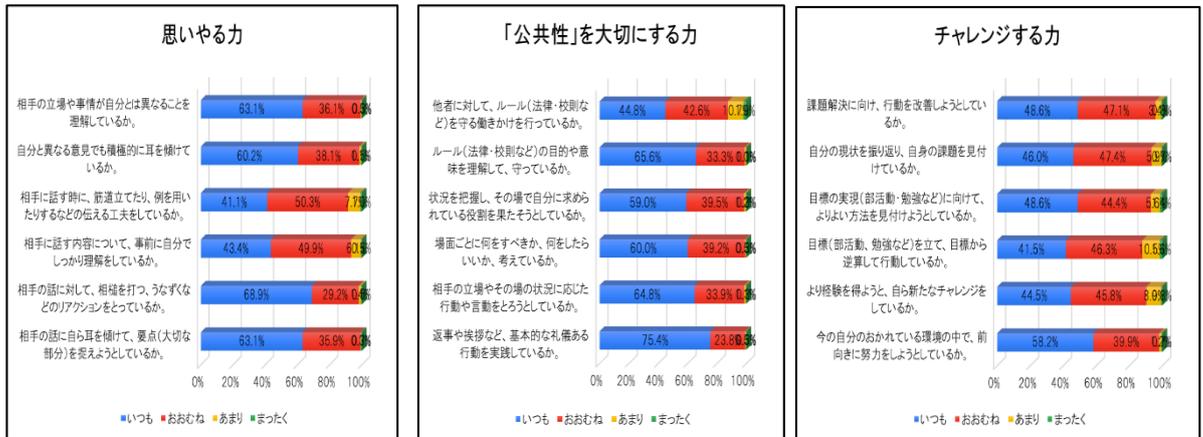
今年度当初の校内研修で、令和6年度に策定したルーブリックを改めて教職員へ周知した。生徒実態と変容の把握のために、心の筋力定着度アンケートを7月12日、12月23日に実施した(併せて教職員対象のアンケートも実施し多角的に生徒の到達度を評価・分析し、指導改善に活用できるようにしている)。

アンケートは実現してほしい認識・行動を18項目挙げ、それぞれ「いつでもできる」～「まったくできない」の4件法で回答を求めた。結果を(表1、p.3)

〈様式2〉 令和7年度埼玉県道徳教育研究推進モデル校 実績報告書

に示した。18項目の全てにおいて、「よくできている」「おおむねできている」と肯定的な回答をした生徒が8割以上(87.4~99.2%)だった。

(表1) 第1回「心の筋力」定着度アンケート(2025.12.23実施、回答数732)



また、昨年度から肯定的回答が少なかった項目は次の通りで、評価と指導改善を重ねることにより着実に資質向上につなげることができていると考える。

(表2) 本校生徒の課題項目の変容 数値は全回答に占める肯定的回答の百分率

質問項目	R6.7	R7.7	R7.12
相手に話す時に、筋道立てたり、例を用いたりするなどの伝える工夫をしているか(思いやる力)	85.0	86.5	91.4
ルール(法律・校則など)を守る働きかけを他者に対して行っているか(『公共性』を大切にする力)	81.6	84.7	87.4
目標(部活動・勉強など)を立て、目標から逆算して行動しているか(チャレンジする力)	84.6	85.5	87.8

## 5 研究の成果と課題

### (1) 成果

#### ① 教科指導を通じた「心の筋力」育成の推進

指導案には、本時で育成を目指す「在り方生き方教育上の資質・能力」と、その定着を確認するための振り返り項目を明記した。これにより、ルーブリックに基づく教科の実践を本校のカリキュラムの中に位置付け、体系的に整理・共有することが可能となった。また、身に付けさせたい力をルーブリックに沿って示すことで、各教科の授業と本校が掲げる「在り方生き方教育」の方針を効果的に接続した。

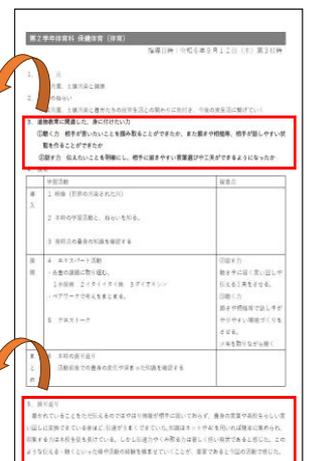
#### 第2学年保健体育 単元「水質汚濁、土壌汚染と健康」

##### 3. 道徳教育に関連した、身に付けたい力

- ①聴く力 相手が言いたいことを掴み取ることができたが、また傾きや相槌等、相手が話しやすい状態を作ることができた
- ②話す力 伝えたいことを明確にし、相手に届きやすい言葉選びや工夫ができるようになった

##### 5. 振り返り

書かれたことをただ伝えるのではやはり情報が相手に届いておらず、自身の言葉や高校生らしい言い回しに変換できている者ほど、伝達がうまくできていた。知識はネットやAIを用いれば簡単に集められ、収集する力は本校の生徒も長けている。しかし伝達力や汲み取る力は低い現状であると感じた。伝える・聴くといった活動の経験を踏まえていくことが、重要である今回の活動で感じた。



## 〈様式2〉 令和7年度埼玉県道徳教育研究推進モデル校 実績報告書

### ② ルーブリックに基づく講演内容の最適化

令和6年度に引き続き、今年度も1年生を対象に講演会（「困難に負けない力、心の回復力”レジリエンス”を育てよう！」）を実施した。本講演会は、「心の筋力」のうち、比較的課題が見られる「チャレンジする力」の向上を目的として開催したものである。生徒アンケート・教職員対象のアンケートの結果を参考に、今年度はさらに規律ある態度の育成を目指し、セルフコントロールの技術を扱うこととした。ネガティブな感情の類型を理解し、それぞれについて前向きに発想を転換する方法を学ぶ内容を取り扱うなど、本校生徒の課題により即した講演会に調整することができた。講演後には、意欲的に講師へ質問する生徒の姿も見られ、適切な講演内容を選択することができたと考える。

### ③ 自己の在り方生き方を問い続ける主体性を育む指導

12月5日（金）に、公開授業・研究協議を実施した。3年地理総合（単元名：国際理解と国際協力-国家・民族・言語の結び付きと生活文化-）では、生きがいチャートやモチベーショングラフなどのフレームワークを活用しながら、日本とアフリカの生活・文化を比較して自分の生きがいと在り方生き方を捉え直す実践を行った。

本単元の学習を通して、生徒の固定化しつつある自己の価値観を、アフリカの生活・文化との比較を通して問い直し、高校卒業を目前に「目標を立てる力」を再構築する契機となったと考える。



## (2)課題

### ① 持続可能な教育活動を目指して

ルーブリックを活用することで、学校組織の中で、在り方生き方教育を各種の教育活動と有機的に接続させることが可能となった。今後は、在り方生き方教育に対する教職員の心理的ハードルを下げつつ、既に学校が持つ多様なリソースを在り方生き方教育と効果的に結び付ける方法を見出していくことが今後の課題である。

### ② さらなる指導改善と環境整備

全体計画の評価および改善に資する調査を実施し、各取組や計画の妥当性を検証していく必要がある。その上で、次年度の実践に必要な人的・物的リソースを確保できるよう、委員会が中心となって計画的に校内へ働きかけていくことが求められる。また、校内分掌や他の委員会とも連携しながら、取組の充実と組織的な取組の強化を図っていく。

## 【引用文献】

- 1 文部科学省「いじめに正面から向き合う『考え、議論する道徳』への転換に向けて」  
[https://www.mext.go.jp/content/20200305-mxt\\_kyoiku02-100002180\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200305-mxt_kyoiku02-100002180_1.pdf) (2026.1.20 アクセス)